二部作『教行信証』

金子大栄

一

『教行信証』は前四巻を第一部とし、これに対して後二巻を第二部と領解してよいものではないであろうか。この論文はそのことを明らかにしたいと思うてのものである。

それについて、先ず着眼せられることは『顕浄土真実教行証文類』という題目は前四巻で十分に満たされていることである。それは「教巻」の初めに「謹しんで浄土真宗を按ずるに二種の廻向あり、一には往相、二には還相なり。往相の廻向について真実の教行信証あり」と提示し、それを「証巻」に「それ真宗の教行信証を案ずれば……」と承けてあることにも顕わされている。しかれば「総序」に「真宗の教行証を敬信して」とあるも、その意に他ならぬのであろう。

されど、或いは浄土真実ということには、浄土方便ということが予想されてあるといわれるかも知れない。しかしそれは後二巻を第二部とするこころに反するものではないであろう。方便は真実を予想するものではあるが、真実は必ずしも方便を予想するものではないからである。真実に直接に相対するものは虚仮であって方便ではない。親鸞に

おいて真実に対するものは外道の思想である。仏教の真理もしばしば外道化されている。しかし、いかに外道化されても本来は仏教であるかぎり、どこかに仏教の面目が見出されねばならない。その真実を見出さしめる教、それが方便といわれるものである。

しかるに、その教が真実であるか方便であるかを決定するものは、その期する浄土が真仏土であるか化身土であるかである。教・行・信・証を相対して真実か方便かを決定することはできない。ここに先ず以て真仏土を顕わし、それを証せざるものを方便教とせられたのであろう。それのみではない。方便とは、それが方便であることを知ることにおいて、そのまま真実に帰するものである。それでなければ方便とは虚仮であるということになってしまうであろう。方便は虚仮ではなく善巧であることを知らしめるものは、その底にある真実に他ならぬのである。

真仏土は色も形もない。しかるに、それが色形あるものとして経説された。その色形あるものを実体的に思想すれば、それは外道化されたものといわねばならぬのであろう。しかし、その色と形とにおいて真仏土の象徴的意義を感知することになれば、その方便こそ真実にもまして有難いものである。それは方便なしには真実を知ることのできないわれらであるからである。

したがって「真仏土巻」は能帰の法である教・行・信・証に対して、所帰の真土を顕わすものであるという古来の説は、否認することのできないものではあるが、それよりは方便化身の意義を顕わす前提と見る方が適切なのではないであろうか。これに依りて「真仮を知らざるに由りて如来広大の恩徳を迷失す」とある「真仏土巻」の結文の意も領解せられるのである。

こうして教行信証の真理は真化の事実に依りて明らかにせられるのである。それは『華厳経』に法界縁起の教理が善財童子の求道物語によりて身近なものに感ぜられることと類比してよいものであろう。教行信証は真実の宗教を顕わし、真化二巻は宗教の真実を求めるこころを明らかにするものである。真実教の宗体を顕わす前四巻と、仏身・仏

土について真化を反省し自覚せしめる後二巻との対応、これに依りてわれらの宗教心が満足せしめられるのである。

二

真実の教は「如来の本願を説いて経の宗致と為す。即ち仏の名号を以て経の体と為る」ものである。その本願のいわれは心にうけいれられて信心となり、その名号ののりは身について念仏となる。その身心は一如であるから、本願のいわれは名号に現われ「念仏者」は「信心の行者」とならしめられるのである。それが行も信も本願力の廻向であるということであり、また「南無阿弥陀仏の廻向」と領解されるものである。したがって、真実の行信は如来の廻向であるということは、外から説明すべきものではなく、真実の行信が、それを身証するのである。こうして二種の廻向から開出された教・行・信・証は、かえって二種の廻向を内感するものとなっているのである。

ここで最も重要なることは、真実教の「体」が先ず以て「行巻」に顕わされたことである。これは恐らく本願のいわれも、名号の体なくしては受け容れられないからであろう。念仏するもの必ずしも信心はないとしても、念仏しないものに信心は生じない。本願のいわれは名号に具わっているからである。したがって、本願を信ずるということも、念仏において行証されるものの他ないのである。

念仏とは、それにおいて自己を発見し、そこに如来の光摂を感知するものである。それは神の実在と自己の実存とを認めてから、それを結ぶ崇拝とは全く異るものである。そこに名号を体とする念仏の意義があるのである。しかし念仏において見出された自身と感知された如来とは、いかなる因縁のあるものであろうか。その因縁を語るものこそ如来の本願というものであろう。阿弥陀の光なくば、この身のありようは知られない。この身を摂取しないところに阿弥陀の光はないのである。こうして、この身と阿弥陀との因縁を明らかにするものは如来の本願である。しかるにその本願のいわれを聞いて、疑うことのできぬことにならしめられているものが、名号の体である。だから、それは

念仏において無意識であったものが、本願を聞くことに依りて実感せられることになったといってよいものであろう。そこに真実教の宗と体とにおいて、先ず以て「体」を顕わされたる所以があるのである。

したがって「行巻」一部は、すべて念仏者に経験せられ身証されることである。今その二三を挙げて見よう。「大行とは無碍光如来の名を称するなり」それは何故に称名でなくてはならないのであろうか。それは念仏が称名であることでなくては「体」を為さないからである。観念の念であったり、念のこころをさとりて申す念であったりしてはその念仏は仏と衆生とを結びつけるものとなるであろう。それでは仏と衆生との因縁を感知することができないのである。念仏は発声を要求しないとしても、必ず称名憶念でなければならない。それが真実教の体としての姿勢である。

その姿勢において経験されるものは「よく衆生一切の無明を破し、よく衆生一切の志願を満てたもう」ということである。われらの苦楽は欲望に煩い悩まされているものである。その煩悩のこころが念仏するのである。その時その念仏は、欲望の底にある無明（おろかさ）を破りて欲望を純化し、志願として満たすのである。その無明を破ることなくして欲望を満たそうとするものは邪教であり、ただ無明を破ることにのみ専念するものはさとりの道というものであろうか。破闇しつつ満願せしめる、それは称名念仏の他ないのである。

こうして「この行は諸の善法を摂し、諸の徳本を具し、極速円満す、真如一実の功徳宝海なり」ということも領解せられる。「行巻」一部は、そのことを広説せるものに他ならぬのである。

三

その「行巻」に次いで「信巻」が顕われた。それは名号の体に具わる義（いみ）を明らかにするものである。その義とは、即ち如来と衆生との因縁である。ここで私は因縁の語意を考えて見たい。国語では由来を因縁という。因縁とは不思議のものであり、有難いものであり、遠くその由来を尋ねても究まりのないものである。それが如来の本願を語るに

「一切苦悩の衆生海を悲憫して不可思議兆載永劫に菩薩の行を行じたまいし時……」といわれた所以であろう。本願の真実は久遠の場に感知せられて、疑いなく信楽せられるのである。

したがって、信心は願力の廻向であるということも、如来と衆生との因縁を遠く由来としてたずねるものに感知せられるのであろう。「念仏の衆生を摂取して捨てられない。故に阿弥陀と名づく」。それは現に感じられている因縁である。けれども、いかなる場合にも過去・未来のない現在というものはない。来至しつつ過ぎゆくもの、それが現在である。だから現に「罪悪生死の凡夫」といっても、そこに内感されているものは「曠劫已来、つねに没し、つねに流転している」ものに他ならぬのであろう。そしてそれが「出離の縁なし」と思わしめているのである。したがって、その自覚を機縁として念仏する心に知らしめられた如来の本願も、久遠の大悲心であると信楽せられるのである。こうして「われらが身の罪障のふかきことも、如来の御恩の高きこと」も、久遠の場において実感せられるのである。

しかれば、この遠く由来をたずねる心こそ、ひるがえって現在の行信を値遇と感ぜしめるのであろう。ここでは因縁不思議とは、値遇の喜びを現わすものである。それは偶然の背後に測ることのできない必然を感じているものである。この身には頼むべき何物もない。至誠といっても内に虚仮を懐くものである。信心といっても、自身に思いを深めたものに他ならぬのである。それが今どうして念仏しつつ本願の心を知らしめられたのであろうか。それは全く偶然である。けれども全く偶然であるならば、そのまま離別することであろう。一たび値遇せる因縁は、永遠に尽くることはない。その因縁は久遠の場において感知されているからである。

ここで私は、また因縁を道理（いわれ）として考えて見たい。『阿弥陀経』には「何が故に極楽というか」とあるものを『称讃浄土経』では「何の因、何の縁ありてか極楽というか」と説いてある。しかれば、仏教に何故という道理は、何の因縁ということであると解してよいのであろう。道理とは因縁があることである。因縁のないところには道理がない。

その道理とは国語のいわれである。いわれは言われるということである。だから如来と衆生とに因縁がなければ「本願を信じ念仏をもうさば仏になる」という道理はないのであろう。存在を分析し総合するものは論理であっても道理ではない。それは、いかに説明されても、いわれの感じられないものである。

しかれば、本願のいわれということも、そこに如来と衆生との因縁が感ぜられるということであろう。そして、その因縁は願言の他に求めることはできない。いわれとは言われであるからである。したがって、如来の本願といっても、経説の願文を聞思するの他ないのであろう。如来の本願は思想として知識し得るものではない。ただ大悲の心音として願言を聞いてのみ身に感じられるものである。「衆生、仏願の生起本末を聞いて疑心あることなし」という。その「生起本末」とは仏願において感ぜられる如来と衆生との因縁の他ないのであろう。こうして「信巻」は真実教の「宗」を明らかにせられたのである。

四

「しかれば、もしは行もしは信、一事として阿弥陀如来の清浄願心の廻向成就したもう所にあらざることあることなし」ということは、行・信そのものの自証である。しかして、その行によりて本願の浄土は能感せられ、その信によりて大涅槃界が証知せられるのである。「証」の語義はあかしであって、さとりではない。それをさとりと訓ずるは仏教に限るということである。これ恐らく、仏教にさとりということは身について証明されるということであることを顕わすものであろう。しかれば、行・信の二巻に次いで「証巻」を顕わされたことは、行証の内容を説き、信証の境地を明らかにするものに違いわない。それはひるがえって、行・信の願力の廻向であることは「証巻」に至りて十分に明らかにされるということである。

その「証巻」に依りて特に明らかにせられたことは、行・信の人生的意義である。涅槃は人生の帰依所であること

は、仏教の通説である。しかして、その帰依所とは、生の依るところとなり、死の帰するところとなるものである。だからそれは生死を解脱せる境地ともいわれるのであろう。それが真宗においては大涅槃界の浄土として説かれることになったのは、そこに一切衆生の帰依所ありと行信せられるからである。

ここには、自身と一切衆生との因縁が内感されている。いかにしても愛と憎しみとの煩い悩みを離れることのできない人間である。それが人間の業縁というものであろう。しかれば、愛憎の煩悩の熾盛なることこそ自他の因縁の深さを反顕するものでなくてはならない。したがって、一切衆生の救われる道でなくては、自身も生死を解脱することはできないのであるから、真に自身の救わるる法がありとせば、それは一切衆生の救われる道を具えているものでなくてはならぬのであろう。そのことを身証せしめるものは、行も信も如来の廻向であるということである。

これに依りて思うに、廻向に往相・還相ありといっても、その廻向の意義を明らかにするものは、特に還相ではないであろうか。利他教化が「思うが如く助けとげられない」という悲しみが、「いそぎ浄土のさとり」を求めることになったのである。とすれば往相自利の道において、還相利他の徳が成就せられることでなくてはならぬのであろう。それはどうして可能となるであろうか。本願力の廻向によるのである。本願力の廻向であるから往相の行信に、おのずから還相利他の徳を成就しているのである。

思うに利他教化を以て自身の道とすることは、大乗仏教の精神である。宗祖親鸞にとりても、それは生涯をかけて夢にも現にも忘れることのできなかったものであったのであろう。それだけ「思うが如くたすけとぐること」のかたきことが痛感されたに違いはない。そこから「小慈小悲もなき身にて、有情利益はおもうまじ」という反省もせられ「五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり」とも思い知られたのであろう。その断念の底から現われたものが「来生において」ということである。しかれば「来生の開覚」ということにおいて来生の有無を思想することは無意味といわねばならない。「来生において」と期することほど人間にとりての深い願いはないか

らである。

こうして二種の廻向は真実の行信によりて証せられるのである。しかれば、これで真実教は十分に明らかにされたといってよいのであろう。しかるに、更に「真仏土」と「化身土」との二巻が編集されることになった。そこには「改めて」の意味があらねばならない。それは前四巻の補説をする必要が感じられたということである。言すでに窮まりて意なお尽きないものがある。その尽きない意を改めて言い現わそうとする、それが補説である。したがって、真化二巻は前四巻のうらづけとなるものである。

五

「真仏土巻」は、真仏・真土の巻であると解せられている。それは已に「仏は則ち是れ不可思議光如来なり。土はまた是れ無量光明土なり」と顕わしてあるから否認のできないことである。引用の文類も、それに応じて真仏と真土との経釈が挙げられているのである。

されど特に「真仏土巻」の編集された所以は、真仏よりも真土を顕わすことにあったのではないであろうか。真仏は無土であるともいわれている。如来に帰依するものは、必ずしも浄土への往生を願うものではない。けれども、真土は必ず真仏の世界であらねばならぬのであろう。それでなければ真土とはいえぬからである。しかれば「真仏土巻」に真仏を顕わされたことも、それに依りて真土であることを明らかにせんがためであったのであろう。こうして私には「真仏土巻」は、真仏・真土の巻ではなく、文字通り「真仏土」の巻であるように思われるのである。

ここに前四巻を顧みれば、真仏すなわち阿弥陀仏に就いては、已に「行巻」において十分に顕わされている。称名憶念において摂取不捨の阿弥陀は内感されているのである。だから「真仏土巻」に顕わされた阿弥陀仏は諸仏の王であるというようなことも「行巻」における諸仏と阿弥陀との因縁において尽くされているといってよい。それが補説

であるとすれば、ただ詳説せられたに過ぎぬようである。しかるに、その即是帰命の称名が、亦是発願廻向之義であることに、言きわまりて意の尽きぬものが感ぜられることではないであろうか。

南無阿弥陀仏の「場」において衆生は自身を見出し、阿弥陀仏を感知せしめられる。その場が一切衆生の帰依所であると思慕せられる時、そこに浄土というものが願われているのである。したがって、真仏土こそは、ひるがえって真実行の意味を明らかにするものとなるのであろう。ここに思い知られることは、真仏土は往生人の世界であることである。已にいうように真仏は土を必要としない。土は往生人の業感である。往生之業念仏為本という。その念仏業によりて感得するところ、それが浄土である。されど、それは如来の本願によりて成れるところであるから真仏土である。そこは即ち、阿弥陀仏と往生人との一味同証の境地である。

これに依りて「真仏土巻」に顕わすところは、専ら弥陀の浄土は即ち大涅槃界であるということであった『大涅槃経』に依りて大涅槃の徳を顕わすにも、特に「浄」と「楽」とについて広く引用されたのも、その意であろう。それは安楽浄土と思い合わされたものではないであろうか。それが、また浄土の祖師たちの言葉においては、浄土は涅槃界であることを顕わされるものとなっているのである。こうして「行巻」と「真仏土巻」との対応が思い知られるのである。

それは更に浄土の祖師たちには、念仏往生の願に酬報せられた弥陀の仏土は、また光明・寿命の願に酬報されたものと開顕されることになった。欲生我国というその国は、弥陀の国であるから大涅槃界であることはいうまでもないことであろう。したがって、往生人も、そこで滅度を証するものでなくてはならない。そのことは前四巻で明らかにせられたことである。けれども、そこにも言きわまりて意の尽きないものが感じられる。聖道の諸師には阿弥陀仏と往生人とは同証であるとは考えられていなかった。そこにも常識があるようである。その常識を超えしめるものは、弥陀の仏国は光・寿無量の願に酬報せるものであるということである。したがって、真仏土は光・寿無量の願の酬報

であるということも、それに依って阿弥陀仏の真報身であることを証明するためではなく、阿弥陀仏国の真実報土であることを顕彰するものである。

この「真仏土巻」において、特に心ひかれるものは、「安養浄刹は真の報土なることを顕わす。惑染の凡夫ここにおいて性を見ること能わず。煩悩に覆わるるが故に」と結ばれたことである。それが真実証を来生にと期せられたことに対応するものであろう。利他教化が思うが如くにならないということも、一切衆生の悉有仏性が聞見に止りて眼見のできないことに依るのではないであろうか。こうして「真仏土巻」は前四巻を裏づけるものとなっているのである。

六

されど、真実の教・行・信・証を顕わす為の補説としては、さらに重要なるものがある。それは現実に行われている浄土教は果して前四巻に顕わされているようなものであるかどうかということである。真宗が現実に行われている浄土信仰と異るものとすれば、それは観念的のものであるということにならぬであろうか。現実に行われているということは、それが何かの要求に応じているものであることであり、そこに歴史的意味もあるに違いない。とすれば、その現実に行われている浄土の行信を反省して、それは真実なるものでないことを明らかにすると共に、その現実の要求に応じている浄土の行信の意味を明らかにせねばならない。その反省における意味の発見を顕わすものが「化身土」巻である。しかして、その反省と意味の発見の根拠となるものが「真仏土巻」である。その意味の発見に依って現実に行信せられている浄土は方便化身土であることが知られ、さらにはその方便により真実が明らかにせられることが思い知らしめられるのである。

こうして「化身土巻」は浄土教の歴史を顕わすものであり、また求道の歴程を語るものである。その巻頭において

「濁世の群萌穢悪の含識、いまし九十五種の邪道を出でて半満・権実の法門に入るといえども、真なるものは甚だ以て難く、実なるものは甚だ以て希なり。偽なるものは甚だ以て多く、虚なるものは甚だ以て滋し、」これに依りて浄土教は説かれることになったと述べられている。これは、仏教はもともと外道の邪執を離れるところに意味があるのであるにも拘らず、実際には外道化を免れない。その反省から浄土が顕われることになったということである。

ここで明らかにしておかねばならぬことは、外教と仏教との相違である。外教は外の解脱を説き、仏教は内の解脱を説くものである。言いかえれば、外教は救いを自覚の外に求めるものであり、仏教は救いを自覚に即して求めるものである。あるいはまた外教は神と人間との存在を信心に依りて結びつけようとするものであり、仏教は因縁の道理において仏と衆生とを見るものである。したがって外教は、善悪と禍福との摂理者を信ずるものである。そこには善は必ず福を招き、悪は必ず禍を来すものであるという予定観念があるようである。それこそ一般にレリィジョンといわれているものの性格ではないであろうか。それが罪福信といわれているものである。そして、それが人間の運命の不可測であることに対しての原始的なる宗教心である。

しかるに、その罪福を信ずる心は、実は罪福に迷うているのである。仏陀釈迦の教は、その自覚から現われたのである。したがって、大乗仏教もまた罪福信に執えられるものであってはならない。それにも拘らず、仏国をこの世に実現しようとする菩薩道は「外道の相善」と同じようなものになった。それは広く仏教の歴史にも見ることができるであろう。されど親鸞にとりては、南都北嶺に見られる現前の事実であった。ここに真実に仏道を成就するためには彼岸の浄土においてと願わざるを得ないことになったのである。

しかるに、こうして浄土への往生を願うものにとりては、何よりもその浄土の性格を知ることであろう。恰もこの要求に応ずるものの如くに説かれたるものは『観無量寿経』である。「彼の世界の相を観ずる」ということにも、その願があったのではないであろうか。その「観」の方法として定善が説かれ、その観られたる浄土への行として散善

が説かれたことは、まことに願生者の要求に応ずるものといわねばならない。まさにこれ釈迦の慈悲方便といただくべきものである。

されど、その定散二善というも、阿弥陀の存在を確かめて念仏し、浄土の性格を知ってから願生しようということであれば、依然として罪福信を離れないものではないであろうか。そのことが自覚されて見れば、浄土を願うものはただ本願を信じ念仏もうす他ないこととなるであろう。そこに法然上人の唱説があったのである。

したがって、本願を信ずるということは、念仏もうすことと別なものではない。それは真実教の宗・体の意義として明らかなることである。されど実際には信心と念仏とは内面的にではなく、外部からの関係として求められているのではないであろうか。念仏のこころに大悲の願心をいただくことを忘れて、念仏すれば救われるに違いわない。それが本願であるから、というところには依然として罪福信が潜在している。されど専修念仏における罪福信を自覚して、それを離れしめるものは、その専修念仏の他にはないのである。したがって専修念仏者こそは、特に罪福信の離れがたきことを深自悔責して本願を信楽せねばならぬのである。その念仏を他にして本願を信ずるというは、畢竟これ本願思想を頼むものである。本願は観念でもなく思想でもないことを思い知らしめるものは、専修念仏に他ならぬのである。

こうして「化身土巻」は、浄土教の展開の上に、自身の求道の歴程を顧みつつ、その帰結において真実の行信を明らかにせられたのである。

七

しかるに已にいうように、本願の由来は久遠の真実である。したがって、われらの求道において到達せるものは、如来の願心において根本のものであらねばならない。とすれば、その久遠の真実は歴史的展開の底を貫ぬき、定散二

善を説かれた経説にも、何とかして罪福信をひるがえして、真実の信楽に帰入せしめたいという仏意があるのであろう。その底を貫ぬくものが感知されれば、歴史的に展開された浄土は真仏土を象徴する化身土として思慕せられ、その真実の信楽に帰入すれば、定散二善の経説も慈悲方便であるといただける。そこに「方便化身土巻」といわれる所以があるのである。

したがって「化身土巻」の妙旨は、阿弥陀の浄土は真化不二であり、浄土の経説に善巧方便あることを顕わすにあるのである。そして、それに依りてのみ、われらは罪福心を自責して真実の信楽をうるのである。しかるに、浄土の経説の慈悲方便を顕わすものは、特に『観無量寿経』である。苦悩の衆生の代表者である韋提希に対しての仏陀釈迦の慈悲は、韋提希の要求に応じつつ、如来の智慧へと導びかれる。そこに教語の含みがある。その教語の含みが隠顕と感じられるものである。畢竟これ仏説の親切である。その親切さが了解されれば「化身土巻」に挙示せられた十三の文言だけではなく、『観経』の至るところにその旨趣を感ずることができるのであろう。かえってその隠顕の方便を感じないものには、『観経』は不可解のものともなるのである。

ここで本願のこころを思う。真仏土は光寿無量の願に依ると顕わされた。されど、その外に化身土を顕わす願はない。しかれば、化身土もまた光寿無量の願に依るものではないであろうか。「真仏土巻」を結ぶにあたりて「既に以て真仮みな是れ大悲の願海に酬報せり。故に知んぬ、報仏土なりということを」というは、それを顕わすものと思われる。「阿弥陀如来は、如より来生して、種々の報応化身を示現したもう、」それが光寿無量の徳用である。

しかるに、その光寿無量の浄土は、念仏往生の願に酬報せるものである。それに対して化身土の業因となる定散二善を誘引し、専修念仏へと帰入せしめるものは、修諸功徳の願と植諸徳本の願であると開顕せられた。それは願は願を生ずる大悲心に依るものであろう。しかし、そうあらしめるところに光寿無量の願があるのではないであろうか。

こうして本願の系譜をたずねることは凡智の及ぶことではない。私は、ここではただ如来の本願とは、即ち是れ久

遠の真実であることを思う。慈悲とは阿弥陀の体に具れる徳であり、本願とはその慈悲の表現であると語られている。されど、真実は本願の他に阿弥陀と呼ばれる体があるのではない。本願そのものが阿弥陀の体である。その久遠の真実に依りて人間の精神史も、求道の人生も成立することを顕わせるもの、それが二部作『教行信証』である。

―昭和四〇・四・二五―

真宗は『教行信証』前四巻で十分に顕わされている、後二巻は必要でない、という意見がある。私はその意見を尊重する。そして、それなればこそ、後二巻は第二部として編集されねばならなかった意味を推求せずにおれぬのである。偏えに同学の是正を乞う次第である。

執筆者住所が掲載されているため
リポジトリ非公開とする。